

た。舞鶴港に入ったのは七月一日の夕方近く。上陸は高砂丸、信濃丸は翌朝上陸した。

動物扱いの一年有余

千葉県 土橋治吉

終戦時、私は朝鮮の感興の市内の学校に駐屯していたのである。昭和十五年十二月一日現役兵として北支派遣軍要員として上野一本松広場に集合、十二月四日芝浦港出帆、十二月七日北支山東省青島港上陸、二日後に済南の南泰安県泰安の部隊第五十九師団独立歩兵第四十五大隊第四中隊に入隊、鉄道警備のかたわら第一期の教育完了と同時に、北支、中支に転戦五十三回、この間に旅団長、軍司令官大将の伝令長の勤務に服す。このとき、陸軍曹長を拝命していた。天皇陛下の御為に死を覚悟して、また軍人勅諭五カ條の誓文を精神としていたのである。

終戦のとき二十五歳であった。終戦のとき、なぜ感興

にいたのかというと、昭和十九年初めに私たちは第十二軍の中に入れられていて近衛兵として皇居を守備するという任務があったからである。このため感興港より日本海を渡るために来たが、日本海には敵の機雷が敷設されていて渡航できず、この学校に宿泊して対ソ戦法の訓練に明けくれたのである。

八月二十日終戦。天皇陛下のお言葉をラジオで聞いて、兵全員激涙した。数人の将校は自決したのである。

翌日ソ連野戦軍の約百名の男女兵が宿泊兵舎を取り巻いて武装解除を要求してきた。部隊全員兵器を持って全員校庭に集合。このとき完全に兵器はソ連兵に没収されたのである。これから先の九月十二日、兵舎を出発するまでの間、約一か月余の間、八回に至る非常呼集をかけられ、官物私物持ち物全部携帯して庭に集合させられたのである。その都度、目ぼしい物は没収されてしまったのである。あと残された持ち物としては、外套、飯盒、水筒、冬長靴、毛布その他日用品若干である。食料になる品物は携帯を許されなかった。

九月十三日朝四時、非常呼集があり、全員集合させら

れ、ソ連将校が諸君はこれより東京ダモイダモイと連呼したのである。出発、同港より輸送船に乗せられて、東京ではなくソ連地ナホトカ港に入港したのである。同港には三日間船中で生活させられ、この三日間食品は一回も配給なし。水筒の水だけであった。上陸の指令で上陸すると、一人馬鈴薯三個配給されたのである。話によると、日本海の渡航はできないので、当分の間、この地で労働してもらうことであつた。上陸地より目的地に向かつたのである。日中は歩き、夜間は羊の群のごとく野宿である。周囲はソ連兵が着剣で歩哨に立っていたのである。

三日目に目的地である捕虜収容所に到着す。収容所名はスーチャン地区第十二収容所トダゴー地名であつた。収容所は山中にあり、三棟あり、一棟の長さ約百メートル、幅十五メートル、高さ約七メートル、二段張りである。兵隊の階級は廃却して、五十人一組として下士官級が長ということになった。収容所の人員は、陸軍兵二千五百人、海軍兵千三百人、計三千八百人で生活が始動したのである。これからの生活は人間扱いの生活ではな

かつたが、この内容について正直に記してまいる。

朝六時起床、全員点呼後、体操をする。食事は燕麦、コウリヤン、馬鈴薯、スーブ。この五品の中より、食事のたびに一品配給支給されたのである。仕事は石炭掘り、道路づくり、大工、左官、その他の雑役であつた。

十一月に入る。収容所の幕舎にツララが下がつてきた。暖房用のドラム管は一棟に三個だけである。棟の周りは土砂を盛り上げて、丸太の壁としてある。ドラム管には薪を投げ入れ、これも夜八時消灯までである。一例であるが、一日の生活として朝七時出発、作業現場に向かう。到着、作業する。夕方五時帰路につくのである。

私たちはこの二か年の間、風呂は一回も入らない。夏は近くに流れる小川へ入り、水浴三回だけであつた。

一年目の冬は兵約三百人が死亡した。二年目の冬は兵約六百人が死亡した。全員死亡された方は栄養失調である。墓穴は地面が凍つていて掘れないのであるが、たき火をして土を熱し、土が若干やわらかくなつたときに鉄棒で掘るのであるが、五十センチの深さにするには三日間にかかるのである。鉄棒の先が尖つていて、トント

と落として穴を掘るのである。

暮舎の中はツララが下がり、寝具はなく、着たまごろりである。防寒靴、外套、防寒帽、毛布一枚着用し、野草の干したもので体の外部に囲って、モルモットのようにして寝るのである。夜は寒くて眠れない。小便に行くのは一夜で三十回ぐらいである。冬期は零下三十五度以下になると作業中止である。しかし、働かざる者は食うべからずの原則に基づくため、食事は一日一回であり、馬鈴薯三個だけであつた。作業場での中食は、常に燕麦であり、飯盒一杯を三人で分配するのであり、分けたあとたき火をしてこの燕麦の中に木の皮、草の根、草の葉などを水で増して各自腹が満腹になるような工夫するのであつた。年間通じて風呂に一度も入ったことはなく、洗濯も一度もない。着用の物がボロボロにならないと交換してくれない。このため全員シラムが繁殖して、服衣類のすべてのとじ目の折り重なった箇所は、シラムがぞろぞろはい回っていた。大便所は板の長さ十メートルぐらいのもの二枚並べ、間仕切りはなく、列をなしての大便である。前の人の尻は丸見えである。

週一回の休日は、暖房用の薪とりに山中に入って担ぎ出すのである。伐採は鋸です。ドラム缶で燃やす一週間分と炊事に使う薪も運ぶのである。病気になっても医師の目に見える外傷は認められるが、その他の病気はほとんど認めてくれない。下痢などの場合は血便を確認して、後休業させてくれるのである。誰も口を開いて話をする人はいない毎日である。腹がすくからであり、力が出ないからである。ズボンが切れてつくろいたいのであるが、針も糸もない。落ちていた細い針金でつくろい止めるのである。

正月二日間は休ませてくれたが、日一回馬鈴薯三個のみであつた。私たちは二年余の間、青野菜は一回も食べさせてもらえなかった。ラーゲルの周りは、鉄条網張りめぐらし、二十四時間四隅には歩哨兵が立っている。月二回程度の銃声がしたが、脱走者の射殺音がある。だが、誰も見に行かない。今朝も戦友が三人死亡した。栄養失調であり、数人で抱きかかえて裏山に運び、鉄棒で掘った穴の中に埋葬したのである。木片に氏名だけ書いて立てたままであり、雨風のため、数カ月で飛んでし

まっつて、誰の墓標かわからなくなつてしまふのである。

入ソ以来、私たちは人間扱いでなく、動物の扱いであつた。冬期は雪の中の作業、一部石炭掘り作業、夜中はツララの下がる幕舎の中の生活。食事は朝昼夜一回一品食だけ、飯盒一杯を三人で分け合つての生活であつた。突然私たちは栄養失調（肛門が天井を向く）状態者百人、六月初旬ラーゲルを出発、ダモイ、舞鶴港に上陸したのである。港の段々畑には、真黄色い麦が美しく実つていた。ああ、これで夢にも見られなかつた祖国の港に入つたのである。感無量であつた。私たちは死んでも共產主義者にはならない決心である。

ソ連沿海州「アクール収容所」の 「忘れ得ぬ記憶」

新潟県 三重堀 芳 三

昭和二十年十月一日、中千島より入ソ、着いた港は沿海州の「ソフガワニ港」。その後、種々作業をしたが、約

二年間過ぎた。約百五十キロメートルも北方の奥だと思われる「アクール収容所」にやらされた。今回はその中の飢餓、生活の極限の状況の一部を述べてみる。

一日の作業が終了し、今、生活の中で何よりも一番楽しいこと、それは夕食である。これは「チト小さいじゃないか」、これは「皮ばかり」、これは「一寸軽いヨ」、目の色を変えての言い合ひだ。それはたった一人当たり百五十グラムの黒パンを、手製の「天秤計り」で分配している俺たちの集まりの言葉である。

そして分配したパンを今度はクジ引で受け取るのである。主食はそれしかないから、みなは真剣なのだ。ちやうどわからず屋の子供と同じ「餓鬼」とでも言うか、みなは腹が減つて仕方がないのである。それと、副食として大豆と綿羊の内臓（もつ）と岩塩とを味付けしたものの、それが「豆のスープ」とでも言うか、汁の方の多いものであつた。量は飯盒の中盒に入る量である。

そして、このようなきまつた献立が一日三度とも同じで、三か月以上も続いた。それが嫌いだしたら食べ物が無い。その糧秣（大豆）が終わると、また同じ物がく